

現況分析における顕著な変化に
ついての説明書

教 育

平成22年6月

室蘭工業大学

目 次

1. 工学部	1
2. 工学研究科	8

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 教育の実施体制

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 基本的組織の編成

社会からの要望に応える教育・研究組織の構築を目指して、平成 21 年度に工学部・大学院工学研究科の全面的な改組再編を行った。教育組織は、工学部昼間コース 6 学科を 4 学科 12 コースに、夜間主コース 3 学科を 2 学科に改組再編した。

理科系科目を重視した選抜によって学生を幅広い 4 つの学科に受入れ、1 年次には、クラス制を導入した学科共通の専門基礎科目を開講するとともに、英語、物理、化学、数学等の基礎科目を履修させて 1 年間学修させた後、2 年次進級時に専門分野のコースを選択させるカリキュラム編成とした。さらに、2 年次にそれぞれの必修コア科目を、3 年次には選択科目による専門性の高い教育を履修させるよう各コースの専門教育を充実させた組織編成に改善した。

本学の卒業生が就職している企業から求められていた英語力の向上については、30 名程度の少人数クラス編成と、TOEIC 試験のスコアに応じた習熟度別クラス編成を導入して対応した。

以上のように、2 年次進級時の専門コース選択制の導入、英語力を高める習熟度別クラス編成等、平成 20、21 年度に教育を実施する基本的組織を再編し、社会からの要望に応える教育組織へと改善したことにより、教育の実施に当たる基本的組織の編成が期待される水準を上回るものであると判断できる。

○顕著な変化のあった観点名 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

平成 21 年 4 月に昼間コースの全てが日本技術者教育認定機構 (JABEE) の認定を受けたことにより、本学の教育を受けた学生の「学士力」到達度の指標に用いる体制ができた。

教育システム委員会を中心に、授業評価、シラバス改善等のファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動を、全学で取り組んだ。

教員の多面的評価システム (ASTA) による教育改善評価に基づき、平成 19 年度から学科長が学科教員と面談する制度を開始し、授業改善に取り組む体制を構築した。その結果、授業内容が改善され、学生による授業評価アンケートの評価項目「授業への総合的満足度」が高い値になった。また、教員相互で授業の参観を実施する学科が増えた。

以上のように、JABEE 基準に対応した教育プログラムの実施、教育システム委員会を中心とする FD 活動、ASTA を用いた教育内容、教育方法の改善策等により、平成 20、21 年度で教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制が大幅に改善されており、期待される水準を上回るものであると判断できる。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 教育内容

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 教育課程の編成

改組再編により、主専門教育課程では、1年次には、数学、物理、化学などの自然科学系共通科目群のほかに、4学科での工学基礎教育において、グループ学習や学科の特色を活かした問題解決型の課題に取り組む「フレッシュマンセミナー」、クラス制を導入した学科共通の専門基礎科目を開講し、さらに2年次でのコース分けの参考となるコア科目を配置した。また、工学の視野を広げる目的で他学科の学生を対象とした「インター・サイエンス」を選択必修で8科目開講した。2年次以降は12コースでそれぞれの必修のコア科目と選択科目による専門性の高い教育を充実させた。

教養教育に関しては、学生全員に社会科学系分野や人間科学系分野を主とした幅広い教養と外国語の能力を身につけさせるための副専門教育課程を再編成した。副専門共通科目を1年次から配置し、とりわけ英語教育は全学共通科目として、平成21年度より、30名程度の少人数クラス「英語A」とTOEIC試験を利用して習熟度別にクラス分けを行った「英語C」による授業を展開し、少人数教育を効率よく実施できる編成とした。2年次からは副専門コース別科目を4つの科目群に再編成し、いずれかのコース別科目を履修することにより、幅広い視野と柔軟な思考力を持った人材養成を可能とした。

以上のように、平成20、21年度で工学基礎教育の集中、問題解決型授業の充実、英語力の向上と幅広い教養教育の推進等によって改善を加えた教育課程の編成は、期待される水準を上回るものであると判断できる。

○顕著な変化のあった観点名 学生や社会からの要請への対応

多様な学力に対応するため実施していた補習授業「基礎理科」、「基礎数学」を、改組後は基礎から学修させることを目的とした「基礎物理A」、「基礎物理B」、「解析A」、「解析B」の授業を全学必修とした。「基礎化学」では全学統一シラバス・教科書を用いた教育を実施した。

社会のグローバル化に対応するため、30名程度の少人数クラス「英語A」とTOEIC試験を利用して習熟度別にクラス分けを行った「英語C」による全学必修授業を展開し、少人数教育を効率よく実施した。

キャリア教育も幅広く展開し、「キャリア・デザイン」の履修率は平成21年度には全学の50%以上に、インターンシップ単位取得者も平成19年度以来、全学生の約3.5%に達しており、全大学の平均よりも高い割合である（平成21年度文部科学省報告によると平成19年度の全大学の平均値は1.8%である）。

平成20年度より、札幌医科大学との医工連携を中心とした道内5大学連携、東京都市大学との大学間連携を推進し、本学の教育の幅を広げた。平成19年度開始の小樽商科大学との単位互換授業「地域再生システム論」の本学履修者は6名から、平成20年度40名、平成21年度52名となり実績が増加した。「社会体験実習」にも、留学生、東京都市大学生を含む16名が参加し、異文化体験と交流で成果を上げた。地元の室蘭栄高校へ出向いて、工学の専門英語教育や課題解決型の教育・実習も行った。

以上のように、平成20、21年度で多様な学生への対応、キャリア教育の充実、他大学や地域との連携の推進により、学生や社会からの要請への対応は、期待される水準を上回るものであると判断できる。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 教育方法

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

平成 21 年度の少人数クラス「英語 A」の学生による授業評価は、5 段階評価の 4 以上と高評価のクラス割合が、平成 18、19 年度の平均 21%から、35%へと向上し、TOEIC 試験を利用した習熟度別にクラス分けをした「英語 C」の授業をより効果的に行えた。

高校教育との接続を考慮して多様な学力に対応するため、改組後は基礎から学修させる「基礎物理 A」「基礎物理 B」、及び演習を強化した「解析 A」「解析 B」の授業を必修講義として開講した。「基礎物理 A」「基礎物理 B」の平均点は、物理 I の履修の有無に関わらず 70 点台であり、基礎から積み上げる学修の狙いを達成できた。2 年次以降は学科に共通の専門基礎科目をクラス制で開講したり、より専門性の高いコース別専門科目をバランスよく行うことで、教育効果を高めた。

デザイン力や応用力を高める演習・実験に力を注ぎ、平成 21 年 4 月には全学科の教育プログラムが JABEE 認定を受け、卒業予定者アンケートによると学生が実験・実習の豊富さを実感している割合は平成 18、19 年度の 57.5%から平成 21 年度は 68%に増大した。「技術者倫理」ではグループ学習や討論を主体とした課題研究授業が行える教室を設け、本学独自の教科書や DVD 教材を制作・活用した授業を展開した。また、社会科学系分野や人間科学系分野を主とした幅広い教養と外国語の能力を身につけさせるための副専門教育課程を 1 年次から配置し、2 年次からは副専門コース別科目に 4 つのコースを設け、幅広い視野と柔軟な思考力を持った人材の養成を行った。

以上のように、平成 20、21 年度で様々な形態の授業を組み合わせた学習指導法の工夫によって、教育方法が改善された。従って、期待される水準を上回るものであると判断できる。

○顕著な変化のあった観点名 主体的な学習を促す取組

実験や問題解決型授業を充実させ、学科の特徴を活かして TA と教員が支援しグループで協力・議論して問題を解決する方法を習得させる「フレッシュマンセミナー」等を全学的に実施した。また、教務支援システム（時間割管理・シラバス作成・閲覧）に関して学生・教員の意見・要望に基づき、平成 21 年度に改善し、学生は学内から成績照会、学外から履修登録やシラバス閲覧などが可能となった。学内無線 LAN システムも強化し、学内のどこからでも教務支援システムに接続できるようにして、学生の主体的な学習をサポートした。学生とのメールのやりとりで予習・復習のための学習を促進・支援している講義もある。この結果、授業内容がシラバスの記述内容に（完全に）沿っていたという割合は、平成 19 年度前期の 63%から平成 21 年度後期では 74%に達し、シラバスの有効利用が促進された。

学生生活実態調査結果を分析して学生の要望を取り入れ、学習に特化したピアサポートの充実、図書館にグループ学習室を増設するとともに、パソコンを集中させて視聴覚コーナーを充実させるなど利用効率を向上させた。また、講義棟、専門校舎にラウンジを新設し、自学自習できる空間を提供し、グループ討論などを可能とした。

以上のように平成 20、21 年度で、問題解決型授業、自習空間の充実、シラバス有効利用や単位の実質化につながる教務支援システムの活用などを推進し、学生の主体的な学習を促す取組は、期待される水準を上回るものであると判断できる。

現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例1 「日本技術者教育認定機構(JABEE)のプログラム認定の推進」

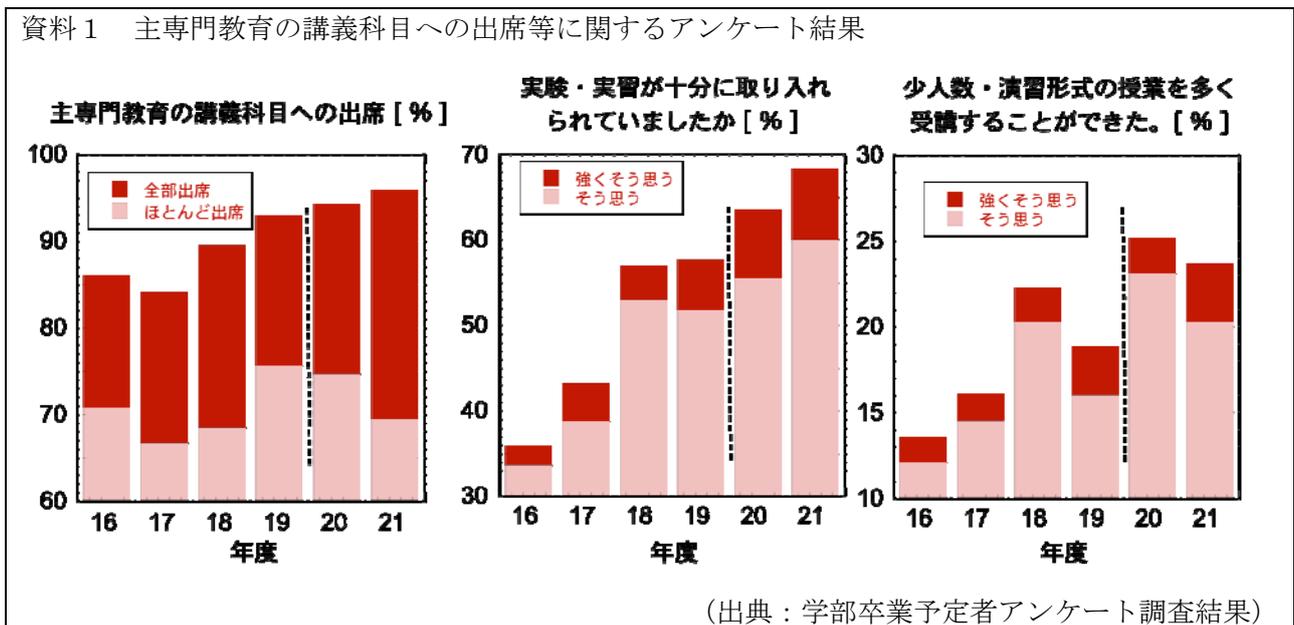
2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成 20 年度に、建設システム工学科建築コース、情報工学科、材料物性工学科応用物理コース、材料物性工学科材料工学コースが JABEE を受審し、平成 21 年 4 月に昼間コースの全てが JABEE の認定を受けた。また、平成 21 年度からの改組に伴うプログラム変更届を平成 21 年度中に申請した。JABEE 基準に対応したプログラムを実施することにより、カリキュラム上の学習時間以上に各科目の教育内容が充実し、単位の実質化、単位認定の厳格化、実験・実習・演習の強化が進み、教育内容・方法の改善につながった。このことは、卒業予定者へのアンケート結果にも明確に現れている（資料1）。

- 従前より、実験・実習科目への出席率はほぼ 100%に近かったが、講義科目に関しても、「全部あるいはほぼ出席した」学生の割合は、平成 16 年度の 86%から平成 21 年度には 96%に増加している。
- 実験・実習の量に関しても「十分に取り入れられている」の割合が平成 16 年度の 36%から平成 21 年度には 68%に大幅に増加している。
- 少人数・演習形式の授業量に関しても「多く受講することができた」の割合が平成 16 年度の 13%から平成 21 年度には 24%に増加している。

以上のように、平成 21 年 4 月に昼間コースの全てが JABEE の認定を果たしたことにより、実験・実習科目のみならず、講義科目の出席率が向上するとともに、実験・実習の充実、少人数教育の実施などが平成 19 年度以前よりも顕著に変化しており、教育内容・方法が大きく改善、向上していると判断できる。

資料1 主専門教育の講義科目への出席等に関するアンケート結果



(出典：学部卒業予定者アンケート調査結果)

現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例2 「副専門教育課程の充実」

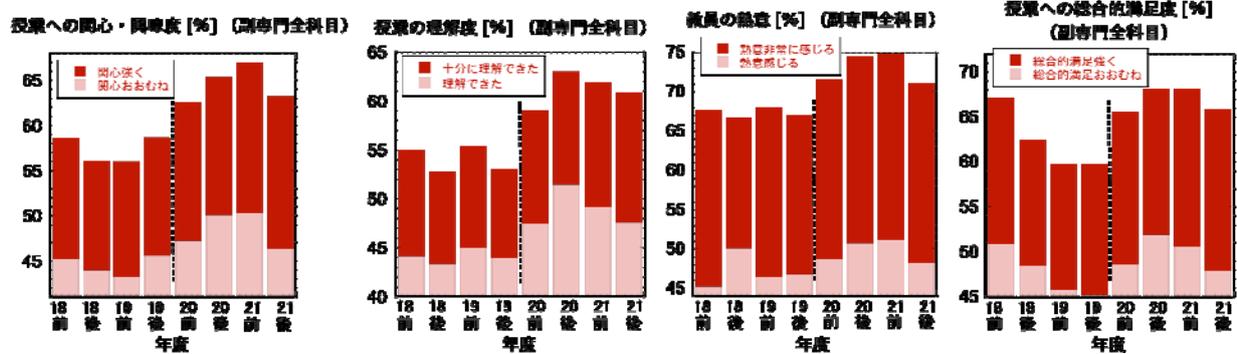
2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

本学の教養教育の中心である副専門教育も、全学的 JABEE プログラムへの対応、1年次のクラス制導入、2年次以降のコース別科目群での第2専門の深化を図る教育を実践することなどにより、副専門教育課程の充実が進んだ。その結果は、副専門全科目に関する「学生による授業評価」において、以下のように顕著に現れている（資料2）。

- 「授業への関心・興味度」を持つ学生の割合は、平成 18、19 年度の平均の 54%から、平成 21 年度の平均は 65%に達しており、授業への関心・興味度の向上が顕著である。
- 「授業の理解度」は、(十分に)理解できたの割合が平成 18、19 年度の平均の 54%から、平成 21 年度の平均は 61.5%に達しており、学生の理解度が向上している。
- 「教員の熱意を感じる」学生の割合は、平成 18、19 年度の平均の 67%から、平成 21 年度の平均は 73%に達しており、熱意を感じる学生の割合は着実に増加している。
- 「授業への総合的満足度」の割合は、平成 18、19 年度の平均の 62%から、平成 21 年度の平均は 67%に達しており、着実に増加している。
- 平成 21 年度の少人数クラス「英語 A」の学生による授業評価は、5段階評価の 4 以上の非常に評価の高いクラスの割合が、平成 18、19 年度の平均 21%から、35%へと向上し、TOEIC 試験を利用して習熟度別にクラス分けをした「英語 C」の授業をより効果的に行えた。

以上のように、本学の副専門教育課程を充実させる取り組みの結果、平成 20、21 年度は授業改善の効果が学生による授業評価に顕著に反映されており、副専門教育課程が大きく改善、向上していると判断できる。

資料2 副専門全科目における授業への関心・興味度等に関するアンケート結果



(出典: 「学生による授業評価」の分析結果報告書)

現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例3 「授業の理解度の上昇」

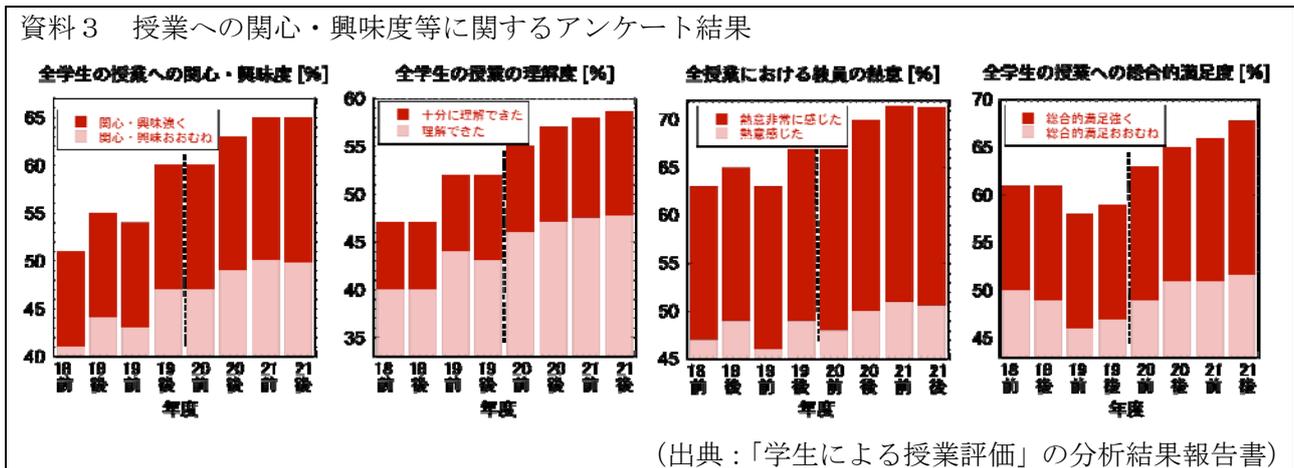
2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

学生による授業評価の中で、関心度、理解度、教員の熱意、授業満足度に関する代表的な設問において、いずれも顕著な右肩上がりで上昇している（資料3）。

- 「授業への関心・興味度」を持つ学生の割合は平成18年度前期の51%から右肩上がりで向上し、平成21年度は65%に達しており、授業への関心・興味度の向上が顕著である。
- 「授業の理解度」は、(十分に)理解できたの割合が平成18年度前期の47%から右肩上がりで向上し、平成21年度は57%に達しており、学生の理解度の向上が顕著である。
- 「教員の熱意を感じる」学生の割合は、平成18年度前期の63%から右肩上がりで向上し、平成21年度は71.7%に達しており、熱意を感じる学生の割合の増加が顕著である。
- 「授業への総合的満足度」の割合は平成18、19年度は平均すると59%であり、平成20、21年度は右肩上がりで向上し、平成21年度は66%に達している。

以上のように、授業評価アンケートの結果から、学生による授業評価の結果が、教員にフィードバックされて授業改善に反映されており、平成20年度以降の学生の授業の理解度が、大きく改善、向上していると判断できる。

資料3 授業への関心・興味度等に関するアンケート結果



現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例4 「キャリア教育の充実」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成 19 年度から、企業動向、企業形態の変化に焦点を当てながら、現代社会で「働く」ということの意味を考え、生涯の職業観を養う狙いで「キャリア・デザイン」が開講され、1クラスの授業で単位取得者は25名であった。平成 20 年度からは、ゲスト講演者として、本学出身の「技術士」を招き、自らの技術士としてのキャリア形成を振り返り、後輩たちにアドバイスするという時間を設けるなどの工夫を行った。クラスも複数クラス制とし、平成 20 年度は2クラスで234名が単位を取得し、平成 21 年度はさらに3クラスとし、単位取得者も308名に達した。この数値は、学部生の就職希望者の総数にほぼ匹敵し、学生の関心度が非常に高い講義に発展した(資料4)。

さらに、学生の企業、業種研究、職業観を養う合同企業セミナーや就職セミナーも積極的に行い、合同企業セミナーへの参加学生数も平成 19 年度より平成 21 年度は2,000人以上増加した(資料5)。

なお、文部科学省の「平成 18 年度特色ある大学教育支援プログラム」に採用された「オムニバス形式による技術者倫理教育の実践」に関しては、平成 20 年度に教科書の出版や、DVD教材を作成し、グループ討論などの授業形態を通して、主専門教育課程の共通必修科目「技術者倫理」のなかで展開されている。また、インターンシップ単位取得者も平成 19 年度以来、全学生の約3.5%に達しており、高い割合である(平成 21 年度文部科学省報告によると平成 19 年度の全大学の平均値は1.8%)。

以上のように、平成 20、21 年度にキャリア教育の取り組みは本学学生に広く浸透し、その充実度は大きく改善、向上していると判断できる。

資料4 「キャリア・デザイン」履修者数

年 度	履修者数	単位修得者数	クラス数
平成 19 年度	26	25	1
平成 20 年度	362	234	2
平成 21 年度	464	308	3

(出典：教務課資料)

資料5 合同企業セミナー実施状況

年 度	参加企業数	期 間	延べ参加学生数	1社あたり平均参加数
平成 19 年度	243	9日	3,917	16.1
平成 20 年度	216	8日	4,457	20.6
平成 21 年度	223	8日	5,972	26.8

(出典：キャリア・サポート・センター資料)

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 教育内容

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 教育課程の編成

平成 21 年度に改組再編した 4 専攻 11 コースに、前年度新設の 3 専攻を加えた博士前期課程の教育課程は、専門毎に基礎科目を基に応用科目の履修が可能で、全学年を通してゼミナール・特別研究を配置して学生が取り組む研究テーマの成果が次第に蓄積していくようなカリキュラム構成とすることを基本にした。これに全学共通科目を加えて、専門以外の科目を幅広く履修して高度専門技術者の養成に資するような教育課程の編成とした。共通科目には、外国人教員や留学生と接する機会を通して、国際的視野を拡げることが可能な「英語プレゼンテーション」や「異文化理解特論」、キャリア教育科目としての短期及び長期インターンシップ、MOT プログラムのために開講している科目等を設定した。

また、英語による授業を充実するために、教育システム委員会において英語による授業推進について検討を行い、平成 21 年度には各専攻の専門科目で 1 科目以上を開講することとし、全専攻で 13 科目を実施した。

以上のような取り組みによって、教育課程の編成が期待される水準を上回るものであると判断できる。

○顕著な変化のあった観点名 学生や社会からの要請への対応

キャリア教育を重視し、企業へのインターンシップを積極的に奨励し、支援した。その結果、博士前期課程学生のインターンシップ単位取得者は、平成 19 年度は 13 名であったが、平成 20 年度には 23 名、平成 21 年度は 52 名と着実に増加し、学生は就業体験を通して職業に対する意識を高めた。平成 20 年度から「長期インターンシップ」を開講し、同年度は 5 名、平成 21 年度は 20 名となり単位修得者が増加した。

国際感覚を醸成するため、学生の英語力の向上と国際的視野を拡げる体験を積極的に奨励し、支援した結果、平成 21 年度は、国際会議及び海外協定校との合同シンポジウムに学生 15 名が参加し、英語での発表・討論を行った。また、平成 21 年度より、国際活動を奨励する奨学賞を設け、英語による面接選考を行い、6 名に支援した。

教育内容の多様化については、平成 20 年度より、札幌医科大学との医工連携を中心とした道内 5 大学連携や、東京都市大学との大学間連携を推進することにより、単科大学である本学の教育の幅を広げて、異分野の教育プログラムを学生に提供できるようにした。

以上のように、平成 20、21 年度でキャリア教育を推進し、英語力の向上、国際的視野を拡げる経験を積極的に奨励し、支援したこと、他大学との教育連携を充実させた実績から、学生や社会からの要請への対応は、期待される水準を上回るものであると判断できる。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 教育方法

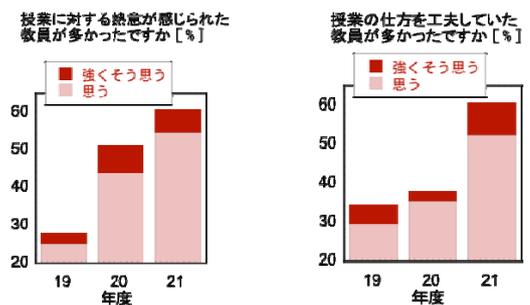
2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

各専攻で、コース共通科目を配置する一方、1単位の専門的選択科目群の開講、複数教員による科目担当により、学生の系統的かつ主体的な選択の幅を広げた。さらに、クラス制や講義と演習を組み合わせた科目群の開講等、学生の関心と理解度を高める工夫をした。修士論文研究では、中間発表、ポスターセッションを設け、学生の主体的発表とプレゼンテーション能力涵養の機会とした。平成20年度からは共通科目として「英語プレゼンテーション」及び「異文化理解特論」を開講して、留学生や外国人教員と接する機会を提供し、国際的視野を広げる工夫をした。博士後期課程では、平成21年度から研究指導報告制度を導入し、修業年限内での学位取得のために広い視野で計画的に研究指導を行う工夫をした。

修了予定者へのアンケートによれば、授業における教員の熱意及び講義手法の改善を感じる割合が年度ごとに増加しており(資料6)、学習指導法の工夫等が期待される水準を上回るものと判断できる。

資料6 授業に対する教員の熱意及び授業方法の工夫に関するアンケート結果



(出典：博士前期課程修了予定者アンケート調査結果)

○顕著な変化のあった観点名 主体的な学習を促す取組

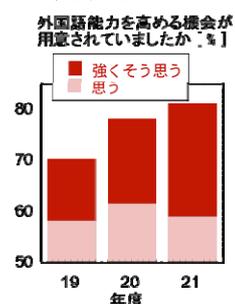
各専攻の修士論文中間発表会は、主体的なプレゼンテーション能力向上の機会となっている。平成19年度より、修士学生の学会発表を奨励・支援する制度を設け、毎年200件以上が利用した。学生の学会発表件数は毎年440件を超えた。

「英語プレゼンテーション」及び「異文化理解特論」の講義により外国人教員や留学生と接する機会を提供するほか、外国人教員による昼休みの「ブラウンバックランチ」の開催など、学生の主体的な学習を促した。また、学内で国際シンポジウムを毎年開催して学生の発表を奨励し、英語でのプレゼンテーションと質疑応答を審査した。修了予定者アンケートによれば、「外国語能力を高める機会が用意されていたか」の問いに対して「そう思う」の割合が平成19年度より平成21年度にかけて70%から81%に向上した(資料7)。

図書館にはグループ学習室を1部屋増設し、パソコンの集中化と視聴覚コーナーの充実を図り、利用効率を向上させた。

以上のように、日本語及び英語によるプレゼンテーション機会の増加や自習施設の有効利用により、平成20、21年度の主体的な学習を促す取組は着実に成果を上げ、期待される水準を上回るものと判断できる。

資料7 外国語能力を高める機会に関するアンケート結果



(出典：博士前期課程修了予定者アンケート調査結果)

現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育/研究)

法人名 室蘭工業大学

学部・研究科等名 工学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 学業の成果

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 学生が身に付けた学力や資質・能力

平成 19 年度より、修士学生の学会発表を奨励・支援する制度を設け、毎年 200 件以上が利用した。学生の学会発表件数は毎年 440 件を超えた。大学院での修学意義を認識させるインターンシップや社会実習体験を奨励・支援し、単位取得者は平成 19 年度の 13 名（全学生比 3.3%）から、平成 20 年度は長期インターンシップ 5 名を含む 23 名（同 5.8%）、平成 21 年度は長期インターンシップ 20 名を含む 52 名（同 13.3%）と大幅に増加した（平成 21 年度文部科学省報告では平成 19 年度の全大学平均は 1.5%）。平成 21 年度には国際会議での発表や海外インターンシップを奨励する奨学賞を設け、6 名に支援した。学内の国際シンポジウムでも英語による発表を奨励し、優秀者には国際会議参加の支援をした。

このようなプレゼンテーション能力向上機会の提供、社会体験を通じた教育により、学生の実践的能力が向上した。学生の学会講演会等での受賞数は、平成 20、21 年度でその前の 4 年間の平均値（10.5 件）から 12.5 件に増えた。また、最近 6 年間の博士前期課程修了生の最低修業年限修了率は 92% を超えており、学生が身に付けた学力や資質・能力は期待される水準を上回るものであると判断できる。

○顕著な変化のあった観点名 学業の成果に関する学生の評価

修了予定者アンケートによれば、「大学院はどのような場であったか」の問いで、「社会に出てから必要となる知識・技術を身につける」との答えの割合が、平成 19 年度の 37% から平成 21 年度には 53% に増加した。「室蘭工業大学で勉強したことを誇りに思うか」の問いも、「そう思う」の割合が平成 19 年度の 70% から 82% に増加した。「学問的に興味のある科目が用意されていたか」「平均的な理解度」等の問いも肯定的な答えが増加した。平成 20 年度より共通科目「英語プレゼンテーション」、「異文化理解特論」を開講したことにより、外国人教員や留学生と接する機会が増え、国際的視野を拓けた。「外国語能力を高める機会が用意されていたか」の問いには、「そう思う」の割合が平成 19 年度の 70% から 81% に増加した（資料 8）。

以上のことから、学業の成果に関する学生の評価は期待される水準を上回るものであると判断できる。

資料 8 大学院の意義等に関するアンケート結果

